研究の栞

歐米人の書ける日本史の栞（第二回）

文學士
法學士　牧　健二

第一、通史に關するもの（續）

3　グリッフィス著「皇國」

Griffis. W.E. "Mikado's Empire". 2vols. New York & London. 1876.

グリッフィス氏のことは前に述べたが、氏は歸米後滯在中に書いた諸論文其他を集めて日本歴史「皇國」二冊を作つた。一八七六年卽ち明治九年に初版を出し、其後修正增補を經て、一九一三年卽ち大正二年には十二版を出して居る。因に前號に氏は慕末以來親しく日本を知れる人であるが如くに書いたが（前號一四三頁）、氏が日本へ來たのは一八七〇年（明治三年）の年末であつて、一八七四年まで學校敎師をして居たのであるから（皇國同氏序文）、封建制度廢止の跡を見た人であるが、慕末以來と書いては甚だ穩當でない。玆に明治初年以來日本に親しめる人であると改めて置く。

二冊の中第一冊は、一八七二年卽ち明治五年ま

での歴史を收む。日本人の信じて居る日本史を書くのが本書の目的であつて、日本史に關する一隣國人の著述を爲さんと企てたものでは無いと言つて居るが(第二版序文)、日本外史が屢々引用され物語や傳記を多く挿入した通俗的な書物である。學術的のものでないが、間々著者の考を述べて居る。

氏に依れば、日本人は容貌より明かに二種の型に分たれる。貴族紳士の階級に屬するものと、農民勞働者の階級に屬するものとがそれで、前者は南方のヤマト型(タイプ)であり、後者は北方のアイノ型である。(29—30) 凡ゆる事實から考ふるに、日本の最初の祖先 (primal ancestors) はアイノ人である。と信ぜられる。今日の日本人の大部分は本來(Substantially)アイノ人である。外國人の混血や、毎日の溫浴の繼續したことや、南日本の溫い氣候や、支那文化や、狩獵生活をしないで農業生活をしたこと等に依り、アイノ人と日本人との間の差が生じたのに外ならぬ。日本人の有する凡ての事物の中で支那朝鮮韃靼に淵源せぬものは、アイノより起り又は之を改良したものであることも確かである。蝦夷地のアイノ人が日本人に對する關係は、政治的にはアメリカインヂアン合衆國の白人との關係と同樣であるが、人種的にはサクソン人が英人に對するが如きものである」(34—35) と說いて居る。

次に古事記や日本書紀は正しい歴史 (sober history) で無いから、西暦二世紀以前の事件を "Dawn of History" となさず、"Twilight of Fable" と言ふ章に於て述べると言ふことが注意されて居る。(42)

宗教に關しては殊に記載する所が多い。氏は言ふ。神道に關して外國の學者が種々研究して見たが、神道は日本の土地に固有に發生したるもので

あるか、又は孔子以前に存したる支那古代の宗教と密接に結合(clossely allied)したものでは無いであらうか、と言ふことに就て多くは決定に躊躇して居るが、後者の意見に從ふ傾向が多い。日本の神話の多くが支那のものと殆ど一致して居ることは確かであつて、宇宙說の多くの部分は支那古代のものと少しも變らぬ。神道家の聖書たる古事記は說話に滿ちて居るが、訓戒がなく、道德又は教理を教へず、儀式が書いて無い。神道は吾等の解する如き宗教の特質を有して居ない。(99)更に神道の最も熱心なる信者や說教師でさへも其の目的は政治的である。ミカドの神性といふ信仰と、ミカドに對する國民の絕對服從の義務とを除けば、支那の宇宙說や地方的の神話や孔子の道德の外に近世の神道として殘るものは殆ど何物もない。(160)此の信仰は其の高い形にては智力に訴ふる無神論であり、低い形にては政府と神官の教へに盲從することであると。(160註)次にキリスト教に就いては、此宗教が戰國時代の末の國民の要求に合致して居たことや、佛教徒がキリスト教に移ることが甚だ容易であつたことや、宣教師はマリア禮拜(Mariolatry)の方法に依つて宣傳したことや、九州では大名が信仰に入つて領民を强制的に改宗せしめたことなどを述べて居る。(249—253)

西洋人との接觸の歷史はかなり詳細に記されてゐるが、ポルトガル人が初めて來てから鎖國までの約百年間の接觸の結果として見はるゝものは僅かに火藥火器を武具として採用したことや、煙草の使用や、喫煙の習慣や、カステラの製造や、新しい變つた病氣の輸入や、アジア諸國の僧侶や官吏が嘗て下民を威嚇する武器として用ひた恐怖の題目が永久的に增加したことである(258—260)と述べた。

明治三年に日本に來た著者には、將軍や封建制

度に對する印象殊に深かつたので、天皇と將軍との關係を說き、王政復古が何故に起つたかと言ふことを說いた點は、此の書物の中の最も重要な點で、書名を皇國とつけたのも此名が日本の國體にふさはしく思はれたからであらう。(45註參照)江戸の將軍卽ち大君(Tycoou)は大化改新の時に出來た軍人階級を遠征の際に指揮したる將軍の類に外ならざるを述べ(104)、又賴朝の時より二重政府(duarchy)が始まつたが、之が永續する唯一の條件は日本の國土に外國人が居らぬことである。外國人と日本との關係が起るや否や、外國人は自然に權力の眞の淵源を考ふるから、二重政府は倒れざるを得ないと言つて居るが(146)、更に明治の革命を論じて、日本の二重政府は外國人が日本に來たので倒れたけれ共、之は革命の原因ではない日本に既に必ず起るやうになつて居たことが、外國人が來たことに依つて、其の起る機會を得たのである。卽ち西洋人が屢々考ふるやうに、彼等が來た爲めに卽ち外からの力に依り(from without)革命が起つたのでは無く、內より(from within)起つて來たのであると說いて、其の由來を明かにせんとしたことは、此書の中の重要なる部分であらう。(291—103)

尙ほ所謂南北朝時代を英國の薔薇戰爭(War of Roses)に較べて菊花戰爭(The War of the crysanthemum)と言つてあるが(第十九章)、當否は別として面白い思付である。又日本人の性質に就ては、ラートゲン氏と異り、甚だ想像力に富むと爲し(351)、且間違ひや不得策を發見すれば、良い方へと移つて行く高尙な方面があると述べて居る。(317)

此書は前述のやうに學術的なものでは無く通俗的なもので、源爲朝や義經の武勇談とか、源平の戰や、日蓮の生立ち、高德、義貞の逸事と言ふが如

きことを挿繪を入れて面白く書いて、日本外史に似た所が多く、封建制度に就ては章を設けてはあるが、多くは武士の風俗や武勇談の類である。日本人の歴史研究の幼稚なるを嗤へる氏が、今日に及んで斯かる日本史を維持せることは誠に奇異の感なしとせぬ。併し明治以後に出た古い日本史の一つで、且今日尚ほ多くの讀者を有するので注意に値ひする。（四六版大形、紙數三二四頁）

第二冊の方には、一八七〇年より一八七五年までの間に於ける著者の日本滯在中の經驗、觀察、並に研究の類と、一九一二年の初卽ち明治の末年に至るまでとの歴史を收めて居る。但し一九一三年の十二版に依る。

4　ナホット著「日本歴史」

Oskar Nachod, "Geschichte von Japan". Gotha, 1906.

此書はラムプレヒト氏の計畫であつた歐洲以外各國史（Geschichte der auszereuropäischen Staaten）の第一卷として企てられたものであつて、宏大なる著述の第一冊として紀元後六四五年に至るまでの上古史を出して居る。

此書の序文に於てラムプレヒト氏の言ふ所に依れば、今日の時代は自然科學の方面にも、精神科學の方面にも、科學的綜合の行はるゝ時代（eine Zeit wissenschaftlicher Synthese）であつて、歴史の研究にも綜合的研究が進んで來たが、此の綜合時代は從來の歴史研究の方法や研究領域の外に、新に二つの方面に於て催促する所がある。卽ち一つには歴史現象の深さの方面に向つて、從來の國家史に對する狹義の地方史卽ち州とか郡とか言ふ限られた地域の歴史の研究が必要であるし、二つには歴史の最も高い方面、卽ち世界史の研究を必要とするのである。そして前者の示す基礎的な歴

史事實を知れば、歴史材料を從來よりも一層徹底的に排列することが出來るし、又後者に依つて人類全體の長い經驗を知れば、今日の時代の本性に適合した新しい形に於て、自然と精神との統一相に關する形而上學的の願望を滿足させ得るのである。そして十九世紀の後葉以來地方史の研究は大に進んで來たが、世界史研究が起るのは尙ほ未だなりと言ふべきである。ラムプレヒト氏は上述のやうな思想に基いて、一般的國家史(Allgemeine Staatgneeschichte)の編纂を三部に分ち、第一部は歐洲各國史、第二部は歐洲以外各國史、第三部は獨逸地方史とすると言ふ大計畫を立てた。そして今茲に掲げたナホット氏の日本史は、右の第三部である。歐洲以外各國史の第一卷として出されたのである。

近世史學界の泰斗ラムプレヒト氏は、其著述に日本の歴史を引用すること屢々であるが、氏の世界史研究の企ての第一着手として、日本史の叙述が爲されて居ることは興味深きことゝ思ふ。斯かる學術的研究を眞に成功させる爲めには多くの困難が存するであらう。

著者ナホット氏は言ふ。今茲に始めて、近世の歴史研究及批判に關する科學的方法に依つて、日本歴史を研究せんとするのであるから、之に結び付いた困難や、斯かる企てを爲すに必要なる著者に缺乏せる資格に就ては、何人も著書より一層明瞭に之を知れる者はない。併し或國の歴史を書くのには、其國の言語文章を熟知することが、先づ條件となるが、日本語を根本的に學修するには、日本固有語の外に、更に無數の支那文字を知るを要し、支那文字の讀み方は支那と異なり、又其の意味も多少相違して居る。それ故、日本語の學修のみでも悠に一生の仕事である。吾等はそれ故に、日本の言語文章を熟知せる人々が、價値ある

原書の飜譯や、資料の註釋や、部分的の歷史研究を爲すのに負ふ所あるは、實に明かな事である。なほ此等の人々が研究するに際しては、日本人殊に素養ある日本人を助手とすることは、缺くべからざることである。余は日本史の著述をなすことのみでも、一生を要し又それだけの價値ある、眞面目な問題であると思ふが、今、日本及支那の言語文章を自由に扱ふことに努力して此の困難な仕事を更に困難にし、從つて又年次を遷延するの不可なるを思ひ、寧ろ之が學修を斷念すべきであると信じた。

ナホット氏の言ふ所は、一般に外人が日本史を研究する爲の困難を率直に言ひ表はして居る。彼は其次に、從來日本の古代史に關しては、古事記日本書紀祝詞等が飜譯せられ、夫れから各時代に亘つて有益な部分的な歷史研究が行はれ、支那朝鮮の資料も飜譯せられて居ることを述べ、更に三世紀半以前よりは、カトリック教宣教師の爲した記事や、カロン、ツンベルグ、ケムペル、ジーボルト等の書いた物があること、又先史時代については西洋人の考古學的研究もあることなどを述べて居るが、研究や飜譯のなほ甚だ足らざるを嘆じて手近な所では水戸の大日本史の飜譯を望み、又大日本史料や大日本古文書の目次だけでも飜譯が出來れば、甚だ結構であるがと言つて居る。

ナホット氏は日本に來り、東京帝大の諸教授の助力などを得て、漸く其の第一冊上古史を一九〇六年に出した。其後研究が完成に向へるや、今之を知らないが、斯かる學術的な日本全史の著述が始められたことは注意すべきであると思ふので、特に右のやうな紹介を試みた。ラムプレヒト氏と日本史研究との關係に就ては他日詳說する機會があらう。又、右の上古史は後に時代史の所で之を紹介する。

5 ナホット著「日本」

Oskar Nachod, Dr. "Japan". (Ulsteins Weltgeschichte, Orient. S. 571 bis 653.) Berlin, 1910.

ナホット氏は上記の大計畫で日本歴史を書かんとしたが、他に一つ簡單な纒まつた日本史をも書いて居る。章を設くること七章、先づ土地及び人民を略說し、次の六章で歴史を書き、最初に半歴史時代(Halbgeschichtliche Zeitalter)と云ふ一章を設けて居る。これは既に前記の日本歴史の序文にも、此の時代を設くることを述べて居るが、古き年代記に、日本に於て、初めて文字を用ゐるに至たと傳へて居るところの五世紀迄の約一千年間は、口碑に依て書かれ支那流の記事等を附加したものであるから、此の時代を半歴史的時代と言ひ一層多くの史料の存する歴史的の氏族時代と名づけらるゝ次の二世紀半と、之を區別すると言つて居る。(日本歴史序文參照)次に氏族時代以後を次の如く五期に分ち、各々一章を設けた。

一、氏族國家 (Der Geschlechter=Staat) Uji=Verfassung.

二、官僚國家 (Der Beamtenstaat) 645—1185

三、封建國家 (Der Feudalstaat) 1185—1600

四、德川幕府の警察國家 (Der Polizeistaat des Tokugawa=Shogunates) 1600—1868

五、明治時代の法治國家 (Der Rechtsstaat des Meiji=Zeitalters)

國家組織の變遷を基礎として、右のやうな時代分けを爲したのに依りても知らるゝやうに、此書は政治史を中心として書かれ、其れに宗教美術等の歴史を附けたものであるが、右に掲げられた各時代の特徵差別が明瞭に指摘された譯ではない。

先づ日本民族に關しては、カウカゾイド種と思

はるゝ石器使用の住民の居た所へ、大陸から金屬器を使用する民族が侵入した。一つは南西九州に根據をとつた蒙古馬來系の人種であり、他は朝鮮から出雲へ來て國を立てた滿洲朝鮮系の人種であつて、之に此等よりも少數なアイヌ人が混つて今日の日本人が出來て居る。(576)

氏族は姓に依つて五族に分たれ、伴造は多くは支那朝鮮より來れる者より出でて工業に從ひ、國造は耕に從へる土地所有者であり、連は神武天皇と共に大和に入りし人々の子孫、及本島先住の豪族に出づるものであり、臣は神武と同樣天照大神の子孫たる神武の同僚の子孫卽ち皇室と血統ある氏族であるが、更に神武の子孫たる氏族があつて臣連は政治上社會上の特權を有したる日本古代の貴族であると說明し(583)、天皇は自己の氏族を支配し、祭祀、軍事、氏族間の爭議の裁判といふ三つの特權を有し、之に依つて權力を昂めたと述べ(584)、又皇位繼承法が無かつたので天皇の選定每に貴族の勢力が加はつたことを指摘して居る。

氏族國家より官僚國家に移つた結果、起つた變化の中最大なるは、國家の收入及之に基く國民の負擔に關する改正であるが、土地を國家の手に依つて分配することを始めて行ふたのは、此の改正と密接な關係があつて、此の土地の收獲に依つて國家の行政の費用が出される。(592) 口分田を受くる者は、新國家組織に於て最も小なる家族の單位となれる戸ではなくて、戸主に依つて代表せらるる個人なることは注意に値する。これは支那の前例に倣つたのであるが、又課稅の必要と結び付いた規定であつて、此の場合には家族には非ざる一個人が權利の主體となると言ふ例外を爲して居る。(593) 官僚國家は平安時代に至つて沒落の時期に入つたが、奈良時代の法制は多くの點に於て嘗て存せし社會の實際、殊に地方に於ける經濟的

の實力關係に矛盾してゐた。卽ち日本の社會の統一と安全とを持續せしむる唯一の基礎である祖先祭祀と密接に結合して、古代の氏の氏族的團結から傳はれる世襲(Erblichkeit)に對する努力が存し之に基いて、官職や莊園が世襲せらるゝに至つた其狀恰もフランク帝國のグラーフがカルル大帝の子孫の時代に、斯かることを行つたのと相似て居る。(602—603)

平安時代には藤原氏が攝政關白となつて政治を行つたが、これは日本史上常に新に見はるゝ、かの統治の實權が事實上皇位に在る者に依つて行使せられずに、彼の名に於て他の人に依り行使せらるゝと言ふ現象に外ならぬものであつて、既に氏族時代には大臣あり、大化改新の時代には後の天智天皇である皇太子あるが如きも亦同樣の例に屬する。(604)

承久の役で北條氏の行つた處置は、明にかの甚だ屢々主張せらるゝ嘗て毀損せられたること無き天皇の神聖と言ふことと一致しない事實である。(613) 又日本で南北朝時代と言へる半世紀以上に亘れる時代にも、皇統が對立して、かの繰返し主張せらるゝ侵されたることなき天皇の神聖と言ふ主張の不完全である一例を示して居る。(618)

キリスト敎徒の歷史に關しては、一五八一年に敎徒の數が十五萬人に及び、(626) 一六〇五年には七十五萬人に達し、大名の壓迫があつたのにも拘はらず、次の年にはなほ增加した。(635) と述べて甚だ多數に見積つて居る。

此書も亦先のラートゲン氏の「日本人の國家及文化」と同樣に、插圖に依つて理會を助けて居るが大日本史料や大日本古文書や國華等より、相當に念を入れて材料を選んで居る。正倉院の戶籍や、相摸圓覺寺所藏の尾張國富田庄の古圖などが、說明を附して寫眞版で收められて居る。更に一五六

八年にポルトガルの世界誌家が描いたと言ふ珍らしい日本地圖を收め、之は西洋人の描いた最も古い日本地圖で、筆者フエルナンド・バズ・ドウラドは一五六八年ゴアで之を完成し、當時の印度副王に献じたものである。ポルトガル人が初めて日本に上陸してより僅に三十年にして、斯く多くの記載ある地圖を作つたことは、正に注意するに足る地圖學上の貢献であると述べて居る。（624—625）此圖は此著書に依つて初めて公にせられたものである。日本本島の北半部を欲いて居るが、宣教師等が其れより以北を知らなかつたから地圖にないのであると說明されて居る。原圖は著色されて居ると言ふが、挿圖にはそれがない。なほ一六二二年卽ち我が元和八年の九月十日に、長崎でキリスト教徒五十二人が刑殺された所を著はした明細な西洋畫を收めて居るが、亦注意すべきものであらう。

本號の紹介は右を以て終るが、通史に關する部分は次號を以て終り、次で時代史に關するものに移るであらう。